



作文2部

文部科学大臣賞

「有記が一番ためになつた」

鹿児島県南九州市立宮脇小学校六年

湯田 有記

「あーつ、もうつ。」

その時ぼくは、すごくイライラしていた。

容しやなく照り付ける夏の太陽にイライラ。一生けん命働いても、いつまでも終わりが見えない広い田んぼにイライラ。暑くて暑くて、倒れそなぐらいなのに、

「有記、何してる。」

と、どなりつけるお父さんにイライラ。

早期米の米取りは、真夏のど真ん中。しかも、カンカン照りの太陽の下でしかできない。最近の米取りは、コンバインという機械でバーッと刈つて、乾燥機に入れて終わりで、ぼくたち子どもが、手伝う機会はあまりないようだが、ぼくの家では、バインダーという機械で稲を刈つて、干して、ハーベスターというだっこ機で米を取る。だから、ぼくたち子どもが活やくする機会が、残念ながらたくさんある。しかも家の場合、手伝いではすまない。

「手伝いに来たよ。」

と言つと、

「手伝いじゃない。てめーの食う米だぞ。」

どなり声が返つてくる。ぐずぐずしていると、

「何してる。」

また、どなり声。お父さんもずいぶんとイライラしているみたいだ。
休けいの時にお父さんが言う。

「お前だけが暑いんじゃない。おれだつて他の人たちだつて暑くてま
いつてしまいそうなんだよ。」

実際、去年、祖父は米取りで倒れた。

涼しくなつてから、ゆつくりやればいいのにと思うけど、急いでや
らないといけない理由をぼくは、知つている。

「さだつが、まわじえよ。」

刈つた稲は、十分に乾燥をさせなければいけない。水分を含んでしまうと米ではなく、稲の種になつてしまふからだ。だから絶対に雨にぬらすことはできない。そうだというのに、米取りに時期を合わすように、「さだち」という雨が米取りのじやまをする。「さだち」に米をぬらさないように、どんなに暑い中でも急いで急いで、稲をかついでハーベスターに運ぶ。ずっと走りっぱなしだ。稲をぬらさないかわりにぼくが、汗びつしょりで激しい雨に打たれたようになつてしまつた。

お盆の日、おいしい新米を食べることができた。それは、本当においしかつたし、なぜかかむたびうれしく思った。あのイライラした何日間を乗りこえることができたからこそ思える気持ちだと思う。しようちゅうを飲みながら、しゃべっている大人の中に、

「今年は有記が一番ためになつた。」

というお父さんの声をきいて、本当にうれしかつた。

「来年は、もっとがんばろう。」

と今の所は思つてゐる。